



会員寄稿

「大人を生きる」

人権・同和教育課 三好 章子

今年の正月、年賀状じまいをした。年賀状じまいをするにあたって、私には会いたい友人がいた。年賀状を出さないということは、「今年こそは会いましょうね」という言葉（社交辞令？）で繋がっていた人との関わりがゼロになるということだからだ。さて、何年も会ってない、SNSで繋がっていない相手と連絡を取るためにどうすればいいのか。スマホに疎い私はSNSの情報の渦から相手を探し出すという高校生のような芸当はできず、去年の年末、年賀状に「今年こそは会おうね！絶対連絡して！090〇〇〇〇〇〇（←私の電話番号）」と書いてその友人に送り付けたのだ！そうして、私は旧友「のりちゃん」と20年ぶりの再会を果たした。

のりちゃんとは大学3年の冬、大阪にある教員採用試験の予備校で知り合った。私たちは同じ大学で、彼女は大阪府の地歴公民科の教諭、私は愛媛県の教諭を目指していた。私たちはすぐに仲良くなり、7月の教員採用試験に向けて、半年間、本当に、二人で狂ったように勉強していた。

その日々から20年たち、再会したのりちゃんは、大学卒業後、何年か講師をした後、配偶者の住む県で学芸員の仕事をしていると話してくれた。「30歳まで採用試験にチャレンジしたのだけど、合格できなくて。でも自分の好きな日本史に少しでも関わっていたくて、学芸員をしている。」「いいなあ、1番なりたかった仕事に就けて。」そう話すのりちゃんの顔を見て、私はふと「ああ、この人は大人を生きているんだな。」と思ってしまった。

世の中に数えきれないくらいの大人がいて、その中で1番なりたかった仕事に就いている大人が一体どのくらいいるのだろう。幸運にも、1番なりたかったものになれたとして、その夢を抱えて生きていくのも、また大変である。叶えたはずの夢は日常になり、やがて当たり前の仕事となる。組織の中で働くということは、自分の思いや努力だけではどうにもならないこともあることを私は知ってしまった。夢を叶えたはずの私は、諦めた友人に対して胸を張れる仕事ができているのだろうか。そう考えるとなんだか後ろめたい気持ちになってしまう。「大人を生きる」というのは、仕事に就き、経済的に自立しているというだけではない。1番なりたかった夢を諦めたとして、諦めたことをいかに上手く呑み込んで生きていくか。諦めた先の日々を、理想と現実の違いにぶつかった先の日々を、どう乗りこなす、どう現実と折り合いをつけて生きていくか。これが大人としての腕の見せどころなのかもしれない。

さて、これから将来に向かっていく高校生に対して、大人である私はどう声をかけるべきだろうか。夢は必ずしも叶うものではないという大人は多いし、そのことは高校生も気付いているはずだ。だからこそ、私は、みんなに目指している夢があるなら、叶うと信じて努力してほしい。夢を叶えようと努力し、その過程でたくさんの人と出会い、縁を結んでいくことが人生をワクワクするものにしてくれるはずだからだ。のりちゃんと過ごした夏から20年もの年月が経つ。なのに、二人で夜遅くまで勉強した大学の図書館の空気感も、一緒に乗った近鉄電車から見た生駒山の夜景も、試験の前日に「お互いに頑張ろうね」と電話したことも、全部、思い出すことができる。その思い出がこれから先、教師として働く私の背中を押してくれるはずだ。のりちゃんとの再会は私にそんなふうに思わせてくれた。

